

～ 「ヒトもアユも遊ぶ大和川を目指して」 ～ 『アユを育てる川仕事』 高橋勇夫さん講演会が開催されました



天然アユの遡上が確認されている大和川ですが、その兆しは確認されて間がなく、アユをはじめとする生き物の生息環境として多くの改善点が残されています。そこで、全国各地で天然アユを増やす活動に積極的に取り組んでおられる高橋勇夫さんをお招きし、10月21日(日)市民プラザ(アゼリア柏原)にて、約100名が参加のもと、講演会を開催しました。

講演会報告

高橋さんは、「アユを育てる川仕事」と題し、多摩川(東京)や奈半利川(高知)の天然アユ復活のための取り組みとその成果をわかりやすく紹介された後、大和川で天然アユを増やすことは可能かどうか？について話を進められました。



写真:高橋氏講演のようす

『小学校の総合学習として大和川を実体験できる機会を増やして欲しい。』などの声があがり、講演会は大好評に終わりました。

講演要旨は、次のページです。

天然アユを増やすうえで、大和川は思っていたほど、環境は悪くないとのことでした。

会場との意見交換会では、『私たちにアユの知識を駆り立てるような講演会をもっと多くして欲しい。』『アユが大和川に戻ってきていることの説明が、水質を考える上で、大和川のイメージを変え、良くなっている現状が伝わりやすい』



写真:意見交換会のようす

※主催:大和川天然アユ研究会(代表 大阪教育大学 名誉教授 長田芳和)
共催:大阪市立大学大学院工学研究科環境水域工学研究室(教授 矢持進)
大和川河川事務所

アユを育てる川仕事

たかはし河川生物調査事務所 代表 高橋勇夫

アユは日本人にはなじみの深い魚で、万葉の時代から夏の風物詩として季節感を運び、その爽やかな香りから香魚とも呼ばれてきた。近年では釣りの対象として人気が高く、釣り人口（年間延べ遊漁者数）はピーク時（1990年代初頭）には670万人に達していた。

ところが、1990年代後半からアユの漁獲量が急激に減少し始めた（図1）。原因として、河川の環境悪化や冷水病などの病気の蔓延などがあげられているが、はっきりとしたことは分かっていない。しかし、我々日本人が古くから親しみ、食料としてきたアユが失われていくことは看過できることではないし、どこにでもいたアユがこれほどまでに急激に減少した背景には、私たちの生活様式が目に見えないところで環境を悪化させていることを示唆しているように思える。

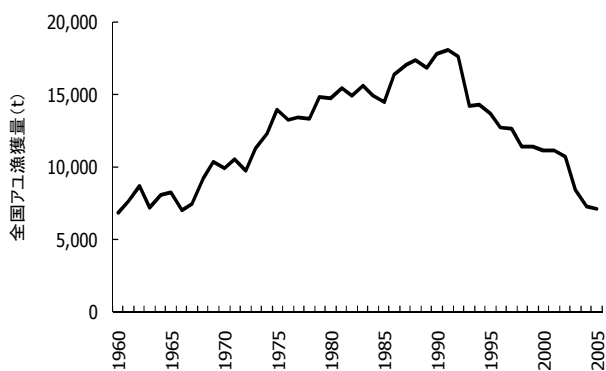


図1 全国のアユの漁獲量の変化

天然アユの復活は可能か？

河川の荒廃にともなう生態系サービス*の低下が顕在化すると同時に、市民が川を自分たちの共有財産として意識し始めた今、環境との調和を図る施策はもはや避けて通れなくなっている。環境修復、自然との共生といったことはたやすい作業ではないが、私たちが生存していくためにも取り

組まなければならない課題であることは多くの人々に理解され始めた。

その第一歩として、身近な資源である天然アユを増やすことに取り組むことは、「共生」への具体策を見つけるためにも意味がある。ただ、これまで放流に頼りすぎたこともあって、天然アユを増やすための技術や制度の整備が立ち後れている。天然アユを復活させることはもう無理だという悲観的な意見も少なくない。天然アユを復活させることは果たして可能なのか？高知県奈半利川での取り組みとその成果を紹介し、天然アユ復活の可能性について考えてみたい。

奈半利川での天然アユの復活の試み

高知県奈半利川は電源開発が積極的に行われた河川で、中上流に昭和30年代に3つのダムが建設された。それに伴い、水がほとんど流れない区間ができたり、濁水の長期化によって大きな漁業被害を出してきた。住民と川をつないでいたきれいな水やアユが失われたことで、住民の川離れも急速に進みつつある。このように奈半利川は、天然アユが健全に生息するには厳しい環境にあり、実際に資源量は大きく減少していた。

筆者は2003年から奈半利川におけるアユ減少の理由と対策を検討するために、アユの生態調査を漁協、電力会社と共同で始めた。まず分かってきたことは、アユの産卵場が著しく劣化（ダムによる河床の粗粒化）していたことであった。アユの産卵に不可欠な浮き石底は消失しており、これが奈半利川から天然アユが減少した要因の一つとなっていた。

対策として産卵場の造成を始めた。この工事は本来は漁協の増殖行為として行われるべきものであるが、産卵環境悪化の原因がダムにあることがはっきりとしたため、ダムを利用している電力会

* 天然アユ、美しい景観、きれいな水等の自然の恵み

社と漁協が共同で行っている。産卵場造成と並行して、産卵に必要な親魚を確保するために、いくつかの漁獲規制を漁協が自主的に設けた。

このような対策の効果は、ふ化する仔魚の数で検証しており、対策を始めて以降、ふ化量は数十倍レベルで増え(図2)、2009年以降は比較的安定した遡上量が得られるようになった。とくに2010年は高知県下のほとんどの河川で天然遡上が少なかった中で、奈半利川で天然遡上が多かったことは対策の効果が大きいと考えられた。

調査を始めて9年、対策の効果を実感できるような結果が得られ始めてまだ3年しか経っておらず、効果を十分に検証できたわけではない。ただ、科学的なデータを元に対策を講じることで、天然アユを増やすことの可能性は感じられるようになってきた。漁協だけでなく、漁協と敵対しがちだった電力会社も協力して対策を実行できたことにも、今後に向けて意味があると考えている。

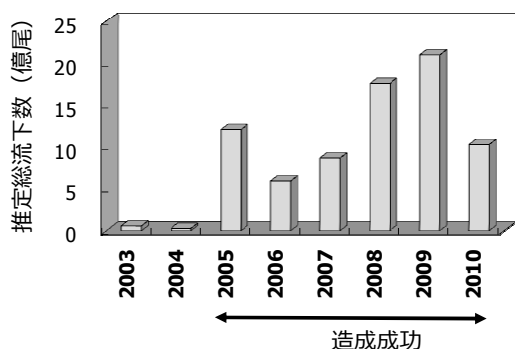


図2 奈半利川におけるアユ仔魚のふ化量の経年変化。産卵場造成を実施して以降急増した

大和川で天然アユを増やすことは可能か？

大和川をはじめとする瀬戸内海流入河川の多くは、高度経済成長期に沿岸の開発が進み、アユの子の保育場である渚が失われた。それに加え大和川では水質の悪化も進んだ。このようなアユの生息にとっての厳しい状況を想うと、「天然アユを増やしましょう」とは軽々しく言えなくなるのも事実である。産卵場を造成して、そこに人工飼育した親アユを放せばOK というような単純な話では成功はないだろうし、努力がまったく報われない

ということもあるかもしれない。

しかし、可能性がないのかというと、決してそうではない。東京都を流れる多摩川は高度経済成長期には「死の川」とも言われていたが、水質の改善、魚道の見直し、人工海浜の造成などによって、今や1000万尾もの天然アユが上る河川へと復活している。愛知県の矢作川では15年ほど前から始まった天然アユを増やす地道な取り組みが実を結び、遡上数が700万尾にも達する年がある。

これらの河川の取り組みとその成果は、大和川でも天然アユを増やすことが不可能ではないことを教えてくれているように思える。

天然アユを増やすうえでの今日的課題

天然アユの保全是流域の環境保全と深く関わる。それゆえに単独で対応することには限界があり、市民や行政等の協力が得られなければ、保全是難しくなっている。ここで問題となるのは、地域によって程度の差はあれ、住民と川の関わりが稀薄になっていて、天然アユ資源の保全是もとより河川の環境保全についても理解や協力が得られにくい状態となっていることである**。

疲弊した川で天然アユを復活させることは、技術的には可能であっても、そのことに多くの人たちが関心を寄せ、協力しなければ、実現はむずかしい。ただ、展望がないわけではない。先にも紹介した愛知県の矢作川では、漁協が川の環境を良くし天然アユを復活させる取り組みを始めたことで、行政や市民だけでなく、水利組合や電力会社の協力が得られるようになってきている。兵庫県の武庫川では、漁協や行政が市民グループに協力する形で天然アユをシンボルとした環境保全活動が始まっている。

このような新しい取り組みの中から、川や天然アユを守り、そして持続的に利用する仕組みが再構築されることを期待したい。

**住民の川に対する関心が稀薄になった理由としては、自らの生業や生活の場面において直接的な関わりがなくなったことなどがあげられている。